

教育スタッフ PLAZA

連載

研修の理解を深める

テスト フォーミュレーション



第②回

作問の流儀②

～「良い問い」「良くない問い」～

市進ホールディングス
コンサルティング事業研究所 所長
細谷幸裕



ほそや ゆきひろ

1996年、株式会社市進入社。現場を経て、2005年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008年からは全国の教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJTトレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。

前回は、学習後のテストづくりが作問者自身の学びにどんな効果を与えるかについて述べました。また、作問者の問い合わせを他者のそれと比較することで、学習者の探究レベルが推察できることもお伝えしました。今回は、作問における「良い問い合わせ」「良くない問い合わせ」の違いについてみていきます。

視点を変える問い合わせ

タイトルに反するような言い方になりますが、テストフォーミュレーションにおいて作問の良い／悪いは基本的にはありません。学習後に自分の学びを作問という形で自由に表現してもらい、その表現が他者とどう違うのか、自分が学びをどうとらえているのかを客観視する点では、評価という発想はなく、良い／悪いもないからです。一方で、ハッとしたせられたり思わず考えてみたくなるような問い合わせも存在します。往々にしてこのような問い合わせには、固定化しそうなものの見方を問い合わせ直す要素や、創造性や遊び心をもたせる要素が入っています。

例えば、OJTトレーナー向けのeラーニングコンテンツであれば、「OJT指導のポイントを3つあげてください」と聞くよりは、「OJT指導について、あなたが勘違いしていたことを1つあげてください」と聞いたほうが探究的な問い合わせになり、コンテンツへの向き合い方も変わってきます。遊び心のある問い合わせづくりであれば、「次の3つの選択肢のなかで、あなたが最も指導が難しいと思う新人のタイプを1つ選んでください」という選択問題をつくり、選択肢に作問者自身が指導に困っている新人の行動タイプをあげることで、作問者自身と他者との価値観の差の共有や、活発な討議が期待できそうです。

このような「視点を変える問い合わせ」や「創造性を喚起する問い合わせ」は、作問側と解答側双方の思考を活性化させるテストフォーミュレーション特有のアプローチといえます。

「なぜ」「どうすれば」のリスク

社内講師養成において「講師スキルを高める一番の武器は何か」と聞かれたら、私は「まず発問」と答え

ます。そのくらい、講師には、話し方や立居振る舞い以上に、相手に考えさせる武器をもっているかが重要になります。質にもよりますが、特に、「なぜ」や「どうすれば」といった Why や How を考えさせるものがパワーエスチョンとなります。

一方で、テストづくりのような場面では、必ずしも Why や How が万能ではないというのが経験的にわかつてきました。知識を学習した後に、「なぜ」「どうすれば」だけを使って作問をしようとすると、ステレオタイプの答えか、学習内容の探究的理を問うものから外れた設問になります。

例えば、OJT トレーナー向けの教材であれば、「なぜ OJT が必要か」という問いは、その理由を答えさせる意味で思考を深める問い合わせになっていますが、問い合わせの幅（レンジ）が広すぎるため、コンテンツを学習していくなくてもある程度答えられます。かといって、学習したコンテンツをもとに答えさせようとすると、そのなかで提示されたフレーズで解答しようとすると、探究的な視点が不足してしまう場合があります。

決して「なぜ」「どうすれば」の問い合わせが悪いといつてはいるのではありません。この 2 つのよさは学習素材の内容理解を本質的に問うときに發揮されるものであって、思考を自在に深められる魔法の問い合わせではないととらえておくとよいでしょう。

テストフォーミュレーションの効果的活用

では探究的かつ創造的な設問はどう活用していくべきなのでしょうか。先にも述べたように、テストフォーミュレーションの最大の特徴は、コンテンツ学習後の問い合わせづくりを他者と共有することで新たな視点が自分のなかに入り込み、探究意欲が高まる点にあります。そしてもう一つの特徴が、自分の問い合わせの視点が他者との比較のなかで浮かび上がることで、自分の思考の癖に気づけるという点です。

実際に、ある企業の管理職研修で使ったケーススタディでテストフォーミュレーションを実施したところ、同じ教材であるにも関わらず、受講者から出でくる問い合わせは人によって大きく異なっていました。ある人は、「部下はこの指導をどう受け止めているのだろう

図表 探究的な問い合わせをつくるための練習問題

この資料を素材にあなたならどんな探究的な問い合わせをつくりますか？

持続可能な開発目標 (SDGs)	
<p>■ 2015年9月の国連サミットで全会一致で採択。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標。(その下に、169のターゲット、232の指標が決められている。)</p>  <p>(①貧困) (②飢餓) (③健康) (④教育) (⑤ジェンダー) (⑥水衛生) (⑦エネルギー) (⑧成長雇用) (⑨インバゴン) (⑩不平等) (⑪持続) (⑫生物多様性) (⑬気候変動) (⑭海洋資源) (⑮陸上資源) (⑯平和) (⑰次世代) (⑲資源) (⑳魚類) (㉑資源) (㉒生物多様性) (㉓持続) (㉔生物多様性)</p>	
普遍性	先進国を含め、全ての国が行動
包摂性	人間の安全保障の理念を反映し「誰一人取り残さない」
参画型	全てのステークホルダーが役割を
統合性	社会・経済・環境に統合的に取り組む
透明性	定期的にフォローアップ
<p>前身：ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals: MDGs)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 2001年に国連で専門家間の議論を経て策定。2000年に採択された「国連ミレニアム宣言」と、1990年代の主要な国際会議で採択された国際開発目標を統合したもの。 ▶ 発展途上国向けの開発目標として、2015年を期限とする8つの目標を設定。 ▶ (1)貧困・飢餓、(2)初等教育、(3)女性、(4)乳幼児、(5)妊娠婦、(6)疾患、(7)環境、(8)連帯 ▶ MDGsは一定の成果を達成。一方で、未達成の課題も残された。 <input checked="" type="checkbox"/> 程度の貧困削減(目標①)やHIV・マラリア対策(同④)等を達成。 <input type="radio"/> 乳幼児や妊娠婦の死亡率削減(同③、⑤)は未達成。サブハラアフリカ等で遅れ。 	
環境	(リオ+20)
人権	
平和	

資料出所：「持続可能な開発目標 (SDGs) 達成に向けて日本が果たす役割」(外務省)

か」、別の人には「この上司がこのマネジメントに至った背景には何があったのだろうか」、また別の人には「私たちはこのケースから何が学べるのだろうか」という問い合わせをあげました。これらの問い合わせからは、作問者の問題意識や立ち位置がみえてきます。この例であれば、「部下」「上司」「私たち」という主語に作問者の視点がみえています。何気なく発せられる問い合わせであっても比較してみると、気づきの多い共有の場になるのです。

コロナ禍を機に、私たちの学びのチャネルは多様になり、それに伴い、学習量も飛躍的に増えました。一方で、「すぐに答える」「大量に答える」という学習場面も増え、結果、深く考える場面が減り、「学習を処理する傾向」が強まってきたと感じています。

そのような環境の中で、インプットした知識や情報を受け取る形で再構築することで個々の理解を深めることができれば、「消費しにくい」教育が展開できるのではないかと思っています。テストフォーミュレーションは、そんな可能性を秘めているように感じます。

さて、あなたなら図表の資料でどんな問い合わせをつくりますか？

*

次回は、答えのつくり方からみえる思考の特徴についてお伝えします。